

「ほら吹きピント」の本当の話 メンデス・ピントがザビエルを支援する

奥 正敬

はじめに

これからご紹介をするフェルナン・メンデス・ピント (Fernaο Mendes Pinto, 1509?-1583) が書いた『遍歴記』(Peregrinacam) という本の内容ですが、どこからどこまでが本当なのか、虚実の判断がつきにくいのです。なにしろ、この人物「ほら吹き」の「愛称」で呼ばれてきただけあって、嘘や誤りが余りにも多いからです。東洋がよく知られていない 16 世紀末期のヨーロッパで、自らの体験を自由奔放に書き綴ったばかりに、後々、発覚してきた数々の嘘と曲筆を、約 400 年近くにわたって指摘され続けてきました。ところが不思議なことに、資料価値がないものとして人びとから忘れ去られることもなく、逆に親しみを持って読み継がれてきた書物なのです。

このようなピントはポルトガル生まれの商人ですが、併せて探検旅行家とでもいうのでしょうか。出生年は詳しくわかりませんが、1509 年頃にコインブラ近くのモンテモール・オ・ヴェリョに生まれています。リスボンでの下働きの仕事を経て、1537 年頃にインドに渡航しました。その後、この頃インドと共にポルトガルの勢力下にあったマラッカに赴き、ここを拠点として貿易商人としての活動をはじめます。彼はこの時代の人とは思えぬ行動力を発揮し、東南アジアや日本を何度も移動し続けました。

「ほら吹き」と呼ばれることになった理由

「広く諸国を巡り歩いた記録」の意味である『遍歴記』を書名とする本書で、ピントは戦いに巻き込まれたことや、海賊に襲われる危機に遭遇するなどして、「13 回捕虜になり 17 回身を売られた」⁽¹⁾と書いています。度重なる危機から逃れ続けた彼は、随分と運の良い人物であったことが窺われますが、反面、このような連続した幸運は信じがたいことでもあります。

また、全般を通じて体験したと思われる事象を流れに沿って述べていることが多く、それを論理的に分析している箇所は見つけにくいのです。

このように考えると、本書は現実とフィクションが織り交ぜられたもので、現代でいえば「冒険小説」の範疇に準ずるものです。本書の冒頭

にある印刷(刊行)を認めた「許可状」の中で、修道僧マノエル・コエリョが「きわめて多様、珍奇なことに満ちたすこぶる立派なはなしであり、それゆえ大いに愉快であろう」⁽²⁾と評しています。従って、当初から一貫して娯楽性の強いものとして扱われておれば、オリエンタルな雰囲気を漂わせた名作と評価され、「嘘」、「歪曲」、そして、拳句の果てには「ほら吹き」などと、ピントが長年にわたって責め続けられることはなかったと考えられます。

しかし、16 世紀から 17 世紀初頭にかけてのポルトガルを中心とするヨーロッパの国々は、海外進出のために、知られざる東洋の情報を少しでも多く入手する必要がある、書名が『遍歴記』ゆえに、本書を国家発展のための資料として活用しようとしたところに無理があったのです。

ピントは種子島へ鉄砲を伝えたか

本書の中で、我が国に関しては日本を発見したことをはじめ、豊後王国(大分で当時の大友領)についてのこと、琉球(沖縄)についてのこと、の三つの部分にわたって記述されています。この内、日本発見については、マカオ近くのランバカウ(浪白澳)から船出した海賊船に便乗したピントと 3 人のポルトガル人が、嵐に遭遇して種子島に漂着し、領主である種子島時堯たねがしまときたかから厚遇され、時堯が関心を示した鉄砲を贈ってその製造を教えたことが書かれています。これは、即ち日本に鉄砲をもたらしたポルトガル人の一人は自分であると主張するもので、また、同時に 4 人の種子島漂着がヨーロッパ人による最初の日本渡航であるとも述べています。

しかし、多くの検証の結果として、ピントは鉄砲伝来年の翌年の 1544(天文 13)年に初めて薩摩半島の山川に渡来したとの説が有力視されています。また、ヨーロッパ人の初来航については、鉄砲伝来の年よりさらに 2 年前の 1541(天文 10)年にポルトガル船が豊後に流れ着いており、現在のポルトガルではこの年を「日本発見年」としているくらいです。このように、本書には意図的とも思える歪曲が随所に見受けられるのです。